心肺蘇生法に神様は必要か？

「ヘルメスという神様は、確か商業の神様なんだよな？　なんかの本で読んだ記憶がある」

　瞬は自分自身の記憶を掘り起こしながら、確かめるように聞く。

「まあね。概ね、君のその認識で正しいかな」

　頷きながら、ヘルメスは瞬を肯定した。

「私の力は、簡単に言えば『好きなお店を商売繁盛させる力』って感じ。お客さんを増やしたりするのが主な効果。やったことはないけど、その逆も出来ると思うよ」

「なら、商人はお前を敵には回せないわけか」

　そんな瞬の言葉に、はっはっはと笑ってから、ヘルメスは首を横に振った。

「その通りっちゃその通りなんだけど、私はそんなことで自分の力を使ったりしないよ。第一、今の商人で私の存在を信じている人がいるかどうか……認知されているかも怪しいね。君が私のことを知っていたことに驚いたくらいだよ」

「それでいいのか神様……」

　認知されていないのは致命的だろう、瞬は心の中でそう呟いた。

「そうなんだよね……知れ渡っていないっていうのは、つまり信仰がないってこと。これは神にしてみれば大問題なわけで。だから最近はその能力がほとんど使えなくなってる」

「……どういうことだ？」

「あのね、私が神様としての力を使うには、エネルギーとして人間たちの信仰が必要なわけ。得られた信仰を消費して、能力を使うって言えば分かりやすいかな？」

「充電池みたいなもんか……」

「ん？　なんだって？」

「いや、なんでもない。それにしても、意外と不便なんだな。神様ってのは」

　もっと全知全能だと思っていた瞬は、そう呟いた。

　それえを聞いて、ヘルメスはフッと笑う。

「そう思っていたのなら、それは買いかぶり過ぎってものだよ。現に神様だって誤って人を殺めるんだから」

「あー……」

　当事者である瞬は、どう答えれば良いのか分からず、曖昧な声を出す。途端、体の中から外に向けて、蹴り飛ばされるような、そんな痛みが僅かに走った。

　ヘルメスの言葉に文句があるのか、それともはっきり否定出来なかった瞬に文句があるのか。

　瞬からしてみれば、少なくとも妖精モドキから聞いた話から判断するに、相手の神様に百パーセント責任があるとは思っていない。車が出会い頭に衝突したときのように、互いに不注意がある程度はあると思われる、まあ一種の事故のようなものだと考えているからだ。

　故にヘルメスの発言は「お互い様だった」と言って済ませられなくもないのだが、そう言わなかった理由は瞬にも実はよく分かっていない。

　蘇生術を施されたため、表には出てきていないだけで、もしかすると瞬自身も自分を殺した神様を恨んでいるのかは分からなかった。

　俺は、自分の命を奪った相手を、どう思っているのだろう。

　妖精モドキに最初に自分が既に死んでいるのだと言われた時から、瞬はこのことについてはあまり考えないようにしてきた。というよりする暇もなかったので、今まで考えずにすんだ、というべきか。

「そろそろ、自分の中で何かしら結論を出さないと、か」

「ん？　何か言った？」

「ああ、いや、なんでもない」

　どうやら言葉に出してしまったらしいと気がついた瞬は、慌てて首を横に振る。

　そして、瞬は一番気になっていたことを聞く。

「なあ、ヘルメス。お前はなんで女の格好をしているんだ？」

「いや、知らないよそんなの」

　なんてこった……と、瞬は「何を言っているんだ」といわんばかりのヘルメスの表情を見て、がっくりときた。

　そして、次の日。

　ヘルメスは、一人で学校へと向かっていた。正直なところ、まだこの辺りに慣れていないので、本当は瞬と一緒に登校したかったのだが、それは瞬が嫌がったのだ。曰く、周りの連中に変に勘ぐられると困る、ということらしい。

　一緒に行かない代わりに、家から学校までの地図はもらっているので、瞬もヘルメスのことを全く考えてないわけでは無いようだが、それにしても少しばかりヘルメスは不満があった。

　昨日は瞬から散々ヘルメス自身のことについて聞かれて、ヘルメスは瞬のことをあまり知ることが出来なかったので、出来れば一緒にいて、瞬のことを色々と質問したかったのだ。

　変な意味ではなく、ヘルメスは瞬に興味がある。自分の姉的存在である、ゼウスが『自魂蘇生術』を施した人間は、一体どんな人物なのか、と。

　数日前、クレイオスを退けたあと、ゼウスはヘルメスに言った。「自分のことは内緒にして欲しい」と。

　それには少し驚き、さらに『自魂組成術』を瞬に施したことにもっと驚き、その後――必要なことなので仕方が無いとはいえ――一神様が人間と接吻をしていたのを見て、ヘルメスは大層驚いた。

　しかし――。

「うーん、あれを使うほどの人間かなぁ……？」

ヘルメスはそう、ひとりごちる。こう言っては難だが、少なくともヘルメスから見て、瞬は『自魂蘇生術』を施してまで生かしておく価値のある人間には見えなかった。彼は少々、粗暴がすぎると感じていた。言葉の端から滲み出る乱暴な単語や、行動もやや目が余るように思える。まだ出会って数日なので、断定は出来ないものの、妖精もどきから聞いた話と自身の印象を照らし合わせた結果、ヘルメスにしてみれば、瞬はあまり『良い人』には見えなかった。

彼とはこれから、どのように付き合っていけばいいのだろう？

そう考えつつも、しっかりと道を確認するヘルメス。思索にふけって道に迷いました、では神様としてあまりにも情けないので、注意を払うべきところはしっかりと払う。

学校に到着し、教室まで向かう間、ヘルメスは十数人の生徒に捕まり、他愛もない雑談をする。ヘルメスに寄ってくる生徒は男女問わずいたが、男子には少し警戒をしなければならない。偶に下心を隠して近づいてくる人がいるからだ。先日はそれに気がつかず、実は「あ、ちょっと危ないかも」と思って逃げてきた人がいる。神様なので、いっそ一思いにぶちのめそうと思えば出来るのだが、それではチンピラとなんら変わりがないのでやらなかった。彼は今はいないが、これからその男子生徒には警戒をしておかなければならない。

ヘルメスが開放されたのは、教室に着いて、自分の席に座ってからだった。しかしそれもほんの僅かの間だけ。数分後にはヘルメスはクラスメイトに囲まれていた。編入生というのはよほど珍しいらしい。正直ヘルメスも疲れてきたのだが、神様なので雑にあしらうわけにもいかず、常に笑顔を心がけていた。

そんな中、ふと、窓際に座って単語帳を眺めている瞬が目に入った。瞬の周りに人はいない。

気になって、クラスメイトに聞いてみる。

「ねえ、瞬君ってさ、いつも一人なの？」

　結局、瞬とヘルメスはただの親戚だ、という話でクラスメイトに通っているはずなので、一人でいる瞬を多少なりとも気にかけるのは不自然ではないだろう。（ちなみに苗字の漢字が同じであることについては、多少強引ではあったが「なんかそうなってるんだよね、アハハハハ」と適当に押し通した）そう思ったヘルメスだったが、言い終わってから、あれだけうるさかったクラスメイトが静かになって、しまった、と思った。

「ああ、神野ね……」

　ヘルメスが瞬の親戚だと聞いているからだろう。言いづらそうな様子で、女子生徒がポツリポツリと話し始め、やがて他の生徒も便乗してきた。

　きっと言葉は選んでくれたのだろうが、本人がそばにいるにも関わらず、瞬への悪評が止まることなく出てくる。生意気で周りとなじもうとしない。学校行事は参加しないわけではないが、かなり非協力的。先生にさえタメ口をきくこともあり、明らかに周りを見下している。そのくせ成績はトップ、等々。他にも挙げればキリがないが、中でも一番多かった不満は、クラスメイトの名前を未だに覚えていない、ということだった。もっと言えば、前のクラスメイトの名前もほとんど覚えていないようであると聞いて、ヘルメスは少し眩暈を覚える。あまりにもどうかと思える瞬の態度に、いっそ感心してしまったほどだ。

「こう言っちゃ難だけどさ。あいつとはあまり関わらないほうがいいよ。ストレス溜まるだけだし」

「むしろあいつって、家だとどんな感じなんだろう？　やっぱ親にもタメ口なのかな？　明菜さん、何か知っている？」

　そう聞かれたものの、ヘルメスも最近瞬と知り合ったばかりなので、そこら辺の事情はよく知らない。知っているのは、親は海外にいる、ということくらいだ。どんな関係なのか、何故瞬をおいて海外にいるのか、それさえも知らなかった。

「んー？　若干横暴な言葉は使ってる、かも？」

　とは言え「知らない」というわけにもいかないので、ヘルメスは昨日の瞬の様子から推察し、適当にそう言って誤魔化した。

　少しだけ寒気を覚える。瞬がヘルメスを睨んでいた。あまり適当なことを言わないほうがいいかもしれない、と、そう思ったヘルメスは目で瞬に向かって「ゴメン」と謝る……が、どうやら伝わってないようで、ヘルメスは心中で嘆息する。瞬の目つきは依然変わらなかった。

　わいわいと話していると、チャイムが鳴る。ホームルームの時間になれば、流石にヘルメスの周りに集まっていたクラスメイト達も自分の席に戻り、そこでようやくヘルメスは開放された。

　先生が入ってきて連絡事項を伝えている間、ヘルメスはなんだかモヤモヤとした感情を燻らせていた。

「…………」

　話を聞く限りでは瞬に落ち度があるように思えるものの、それでも誰かの悪口を聞くのは、いい気分はしない。

　それにしてもこのモヤモヤは、自分が思う「モヤモヤ」とはちょっと違う気がして、先生が話している間ずっと、ヘルメスはそれが何なのか考えていた。

　昼休み。屋上にて。

「ねえ、瞬」

　一緒にお昼ご飯を食べようと誘ってきたクラスメイトに断りを入れて、ヘルメスは瞬に話しかけた。落下防止用の策に寄りかかって座りながら、瞬は弁当を広げている。「なんだ？」とやや面倒くさそうな声を返してきた。

「瞬ってさ、友達いないの？」

「直球だな。いない」

　ヘルメスの質問に、瞬も直球で答える。その間も、瞬のおかずをつっつく箸の動きは止まらない。

「どいつもこいつも付き合うに値しない馬鹿ばっかり……なんて、鼻につく優等生のテンプレみたいなことは言わんぞ？　ただ、友達付き合いとか色々面倒なだけだ」

「なんか色々生意気なこと言っているって聞いたけど、本当？」

　ヘルメスがそう聞いた途端。瞬の箸が止まる。

「……間違っては、ないんじゃないか？　多少生意気なことを言っている自覚はある」

「クラスメイトの名前をまだ全員覚えてないって言うのは……」

「あー、そう言えば、覚えてないな。この間クラス替えがあったばかりで、クラスの連中は俺の知らない生徒ばっかりなんだ。この学校、生徒の数が多すぎるからな」

　それについてはヘルメスも同じことを思った。想像していたよりずっと、生徒の数が多いのだ。それでもヘルメスは、自分によく話しかけてくれる子の名前くらいはもう覚えている。誰一人覚えていない、なんていうのは、恐らく瞬一人だけだろうとヘルメスは確信していた。

「ま、あいつらの名前なら、夏休み前くらいになれば自然と全員覚えているだろう。そんなに積極的に覚える必要もない」

「いやいや。もっとクラスメイトに興味持とうよ……」

　呆れるやらなんやらで、少し話しただけなのに、ヘルメスはかなり疲れていた。

　瞬は、弁当の残りをかっ込む。普段の印象からはあまりにも似合わないその行動に、ヘルメスは驚いた。弁当箱が空になるまで瞬は一言も発さず、弁当箱が空になっても何も言わず、弁当箱を片付けてからようやく、ポツリと呟くような声を出した。

「……悪いけど俺、合理主義なんだ。無駄なこととかやる気無いし。あいつらの名前を覚えるくらいなら、もっと覚えなきゃならないことがあるだろ？　明日の英語のテストに向けての英単語とか、さ」

　そして瞬は足早に屋上を出る。残されたヘルメスは、ただぼーっと、瞬の背中を眺め、そこにつっ立っていた。

「……クラスメイトの名前を覚えることは、別に無駄なことなんかじゃないと思うけどな」

　気がつけば独りごちていた。

　本当に、ゼウスがどうして瞬に『自魂蘇生術』を使ったのか分からない。気に入るところなんて、少なくとも自分には見つからない。ヘルメスはそう思うのが八割。

　そして、明日の英語のテストって何？　ってのが二割の気持ちで、教室へと戻っていった。